

# イギリスの欧州共同体加盟をめぐる 労働党の内部論争

——特別党大会（1971年7月17日）の顛末——

北 西 允

—

1971年7月18日、イギリスの欧州共同体加盟の是非をめぐる、労働党は特別大会を催した。72年の党史のなかで、年次大会のほかに、特別大会が招集されたのは、これが二度目である。場所は、ロンドンのウエストミンスターにあるセントラル・ホール。1912年創建にかかるこのホールは、メソジスト教会の本部であり、1946年、国連総会の最初の会議場になったところである。玄関上のバルコニーからは、議会広場をへだてて、正面に議事堂のビッグ・ベン、右手にウエストミンスター・アヴェイが間近かに望める。

開会前、加盟反対のロビアーたちが、色とりどりの旗やブラカードを手にして、会場の外に集っている。その数約600。労組やショップ・ステュワード委員会の名のほかに、共産党その他の左翼団体の名も読みとれる。入口近くに密集したロビアーの頭上には、「ヨーロッパのボスどもに反対する左翼の統一を」、「共同市場ノー、いまずぐ総選挙を」などの横断幕が掲げられている。豚をかたどった巨大なブラカードの脇腹には、「イギリスのペーコンを教え、共同市場に加わるな」の文字が書きつけられ、ひととき人目をひいている。ロビアーたちは、大小の旗やブラカードを手にし、「共同市場に入るな、ヒースをやめさせろ」のシュプレヒコールを繰返す。一人の若い婦人が、労働党ヨーロッパ支持委員会のパンフレットをしつかり両手にかかえて、いささかしょざいなげにつっ立っている。反対派

の青年が近づいて、「あなたは少し場違いじゃないのかね」などとからかう。係員が、入口で入場券をチェックしているのだから、到着した代議員は、列をつくって入場を待たねばならない。その一人ひとりに、ロビアーたちが、「がんばってくれよ」などと声をかけながら、パンフレットやビラを手渡す。

定刻10分前、会議場に入ると、セント・ポール寺院と大英博物館の読書室について、ロンドンでは三番目に大きい丸天井を載く場内も、1000余名の代議員と、ほぼ同数の来賓や傍聴者を呑んで、むせかえるような暑さだ。廊下やロビーも、三々五々語らいあう代議員らでいっぱいである。役員や係員が、その間をあわただしく縫ってゆく。会場は教会の建物だから、党大会につきものだとされるアルコールは、ここではご法度。飲物はお茶とコーヒーだけだが、その売場もけっこう賑わっている。

## 二

9時30分、書記長ハリー・ニコラスの司会で、定刻どおり大会は始った。慣例によって、全国執行委員会議長、イアン・ミカードゥが、大会議長に選ばれる。かれはウィルソン派と知られる幹部の一人だ。がっちりした体軀、硬そうな白髪、黒く太い眉、ごっつい黒縁の眼鏡、ドスのきいた低音。

開会演説のなかで、議長は、まず、この大会が、党史上二度目の特別大会であり、一度目——それは50年以上も前の、1918年11月14日のことであるが——それも、1日かぎりの大会で、場所も同じこのホールであったことを、代議員に想起させた。かれはつづけた。それは、労働党がロイド・ジョージの連立政府から退くべきかどうかを決めるために招集された。バーナード・ショウが熱弁をふるった。賛否の意見が、みごとにたたかわされ、最後にひとつの結論がでた。当時、もちろんまだ若かりし G. D. H. コールは、数日後、昔の『ヘラルド』紙上に筆をとって、「先週の特別大会の決定は、党のあらゆる部分の政治的統一を実現した」と、高く評価したものだ。今後、大会について執筆するものが、われわれの間の意見の相

違にもかわらず、この大会が党の根本的統一を表現したという評価をくだすことを、わたしは切望してやまない。

中間派幹部のヘゲモニーのもとにおける党の統一。これこそ、特別大会の運営にあたってハロルド・ウィルソンら多数派幹部を支配した主たるモチーフであった。イギリスの欧州共同体加盟をめぐる、大会前、党内の意見は、大きく割れていた。前日、社説でこの問題を論じた『タイムズ』によれば、それは三つに区わけされた。第一は、保守党政府がとりきめてきた条件にもとづいて、共同体への参加を支持するグループである。かれらは、労働党全体の中では、いちじるしく劣勢であるが、議会労働党では少数派ながら、かなり有力な地歩を築いている。このなかには、以前、労働党政府の時期に、党の対欧政策を担当した者が、ほとんど全員含まれている。すなわち、当時、外相をつとめたジョージ・ブラウンとマイケル・スチュワート。加盟交渉の衝に当たったジョージ・トムソン。それに、現在、陰の内閣で、欧州問題のスポークスマンを勤めているハロルド・レヴァー。このグループのリーダーは、副党首のロイ・ジェンキンスである。

つぎは、党首ウィルソンの率いる中間グループ。これは、イギリスの共同市場参加に原則的には賛成なのだが、加入条件を重視して、保守党政府がとりきめてきた条件は、いろんな点で満足すべきものではないと考えている。このグループに属するのは、議会労働党の相当部分と、TUC総評議会議長ジャック・フェザーに代表される比較的穏健な労働組合員である。

第三のグループは、いかなる条件、いかなる状況のもとでも、加盟に反対するものから構成される。このグループの大部分は、将来、労働党が政権についた場合、かりに、イギリスがすでに構成国になっていても、共同市場から脱退すべきだという立場をとっている。このグループのもっとも有力な指導者は、ほとんど院外にあり、その重みは、大会において、あわせて約200万の投票力を誇る運輸一般労組のジャック・ジョーンズと、合同機械労組のヒュー・スキャンロンに負っている。

議長ミロードは、今日は、賛否双方からできるだけ多くの意見を聞く機会をえたいとのべ、「理解と寛容」をもって、あらゆる意見に耳を傾け

るよう訴えた。「わたしの手もとには、40人の下院議員をふくむ80人以上のものから、演説の機会を与えてほしいという依頼があった。なかには、なぜかれを指名しなければならないかを、5点にわたってこと細かく長々と論じた手紙を、わたしに書き送ってきたものもある。ところが、ご本人は、あわてて署名を忘れたために、わたしには、かれが誰であるかを知る手掛りがない」と、かれは代議員を笑わせた。ベテラン、ミカードウの適度の諧謔をまじえた采配もまた、会場の雰囲気をやわらげ、「党の統一」に貢献することを意図したものとうかがえた。

冒頭、運営委員長グリーン・ウィリアムスは、あらかじめ代議員に配布されていた全国執行委員会のステイトメントを、正式に提案した。それは、全文つぎのように読まれた。

「全国執行委員会は、政府白書に盛り込まれた諸条件にもとづく、イギリスの欧州共同体への加入にかんする明快な決定を、7月17日の特別大会の議事に徴して、7月28日の会議で行うことに、意見の一致をみた。

この決議は、この問題につけ加えられる可能性のある他の諸案件とともに、年次大会の討議にふせられるであろう。執行部の決議は、7月28日に選挙区労働党、ならびに加盟各団体に回付され、それにたいする修正案は、8月20日の締切日までに提出できる。全国執行部は、この問題にかんする年次大会の討議に役立てるため、9月に、事実関係を明らかにした文書を、選挙区労働党、ならびに加盟各団体に配布するつもりである。全国執行委員会は、ここに提案する日程と手続きとを承認するよう、大会に求めるものである。」

前記の第三グループを代表して、執行部ステイトメントの撤回動議を提出したのは、下院議員アルフ・モリスであった。演壇に立ったかれは、もの静かな態度で語り出した。

「保守党とイギリス産業連盟は、すでに決定をくだしている。われわれの決定は、遅きに失している。われわれが一時しのぎをしている間に、敵は活発なキャンペーンを展開しつつある。……国民はわれわれの決定を待っている。今日、決定をくださなければ、貴重な時間を空費することにな

ろう。」

かれが提出した動機は、つぎのようなものであった。

「本大会は、共同市場にかんする全国執行委員会のステイトメントを考慮にいれつつも、

(i) 現政府がとりきめ、白書に示された諸条件にもとづく、イギリスの共同市場への加入に反対する。

(ii) 加盟問題は、総選挙でイギリス国民に問うべきだと信ずる。」

財政部長ジェームス・キャラハンが、雑壇から撤回動議にかんする執行部の見解を説明した。かれの態度は自信ありげに見えた。大会が、今日、決定をくだすことをさしひかえるよう希望すると、かれはのべ、その理由をさとするような口調で語り始めた。執行部が、7月に特別大会の招集をきめたのは、下院が7月に結論をだすと予測されたからである。ヒース首相は、事を急いでいた。にもかかわらず、議会労働党は、保守党の一部陣笠議員の支援をえて、決定を10月に延期させることに成功した。だから、遅ればせになったり、時間を空費したりするおそれはない。来週行われる下院の討議で、詳細な説明を聞き、きびしい追求を行えば、これまでに手に入らなかった多くの情報がえられるだろう。週あけの月曜日に討議が終れば、執行部は、ただちに会議をひらいて結論をだし、一般に公表する。10月に予定される年次大会には、下院における決定以前に、執行部声明の修正をふくめて、独自の決定を行う完全な権限がある。大会としても、いそいで準備された先の決議案を採択するより、その方が得策ではないか。かれは、つぎのような一節で演説をしめくくった。

「最後に一言、わたしは、大会にむかっていいたい。共同市場の討議が終っても、保守党にたいして晴らすべきうらみがある。…現政府は、ペテンの上に選ばれたのだ。…この問題にかんする全国執行部の計画は、党の最大限の統一を維持するという方向で立案されよう。そのことが、保守党政府を放逐し、イギリス国民にかわって恨みを晴らすために、必要が起れば、ただちに国民に信を問うことを保証するみちである。」保守党政府にたいする平手打ちと、党の統一へのアピール。それは、けっして新鮮味ある

主張ではなかった。しかし、ここではじめて割れるような拍手が起った。

中間派主導下における党内論争の収拾、それが、左派提出動議の通過を阻止し、決定を秋の定期大会にもちこそうというウィルソンら執行部多数派の意図であった。

撤回動議にかんするカード・ヴォートが求められた。結果は、動議賛成 2,624,000票、反対 3,185,000票。撤回動議は敗れた。約 100 万の投票力をもつイギリス最大の労組、運輸一般労組と、88万票の合同機械労組が、クライヴ・ジェンキンスのホワイト・カラー労組にバック・アップされて、モリスの動議を支持した。しかし、共同体加盟反対の有力労組のうち、かなりのものが、撤回動議の反対にまわった。それらの組合は、大会前、キャラハン、あるいはウィルソン自身の説得をうけいれていた。中間派の勝利に貢献した労組のうち、最大の組合は、全国炭鉱労組 (304,000 票) であった。それに同調した労組のなかには、郵便労組 (182,000票)、公共被使用者組合 (150,000票)、運輸関係サラリーマン組合 (57,000票) が、ふくまれていた。

結論をださないという決定がおこなわれたことは、特別大会を無意味な討論会に変えたともいえる。会場の緊張はゆるんだ。

### 三

討論の開始にあたって、議長ミカードゥは、党内各部門の賛成、反対の意見を順次組合わせてゆく旨説明した。

論戦の口火を切る栄誉を与えられたのは、賛成派のスタンリー・ヘニグ (前下院議員、ランカスター選挙区党代表) であった。かれは、その後くりかえし論議的になったひとつのテーゼをうちだした。「一国社会主義は、全く不可能である。わが国はけっして孤立主義であったことはなかった。もし共同市場に参加しないなら、われわれは、世界でもっとも重要な社会民主主義者に背をむけることになる。」かれはつづけた。単一の政府の統制外にある多国籍企業が、力を伸ばしている。これらの企業は、各国政府の共同行動によってのみコントロールできる。

つづいて演壇に立ったレイ・アブス（反対派、ブライトン・ケンプトウン選挙区党）は、まず、E C加入がイギリスの労働者に及ぼす影響から説きはじめた。労働者は、生活水準向上にたいする長期の保証もなしに、加入からくる犠牲に耐えねばならない。それは、80万の失業者と、冬期には、老人に死をもたらすだろう。「搾取者と条約を締結することは、イギリスの労働者のたすけにはならない。」こう語ったあと、かれはヘニグにたいする反論に転じた。

「前の演説者は、イギリスの共同体加盟によって、われわれは、欧州の兄弟とともに国際独占体を支配できると語った。しかし、もし、これらの独占体を統制しようと思うなら、それを接収することが必要だ。所有しないものを支配はできない。われわれに必要なことは、まず、わが国の独占体の公有化を計画して、保守党に総選挙を挑むことである」と、かれは主張した。

ロイ・グランタム（賛成派・行政事務労働者組合）は、別の問題をもちだした。「加盟反対者のなかに、イギリスが共同体に加われれば、もはや、英連邦諸国への輸出ができなくなるというものがある。しかし、1960年から70年の間に、イギリスの対英連邦輸出は、25パーセント増加したにすぎない。ところが、西ドイツの英連邦への輸出は、140パーセントも増えている。イギリスは、E E Cの外にとどまるなら、10年のうちにヨーロッパでいちばん貧しい国になってしまうだろう。英連邦特惠の価値も、15年以内にインフレによって相殺されてしまうだろう。」

つづいてかれは、前のレイ・アブスにたいして皮肉をこめて反論した。交渉は半ばを終えたにすぎない。加入のあかつきには、交渉が続行されるだろう。「真の交渉は、ヨーロッパ内部でおこなわれるのであって、外部においてではない。」そのあと、かれは、反対派の有力な論点のひとつ、E E C財政にたいするイギリスの過重な負担にふれて、相対的に貧困なイギリスは、共同体の財政にたいして、最も多額の拠出をつづけることを容認はすまい。ひとたび加入すれば、イギリスの交渉当事者は、あらたな提案をもちだすことになろうと、その見通しをのべた。

つづいて登壇したのは、絶対反対派の R. W. ブリジンショウ（印刷労働組合）であった。「わが国の支配者は、過去10年間をつうじて、国家的敗北主義のムードを醸し出すために、故意に国民の士気を阻喪させてきた。」なるほど古い秩序は、ゆきづまるかもしれない。しかし、われわれにとっては、EECの外にとどまることこそが、すべての問題を解決する途である。それは安易なみちではない。だが、政治的意思とリーダーシップをもってすれば、問題は解決できると、かれは断言した。われわれと類似の地理的立場にある日本には、意思があった。われわれは、異った方法——わたしは「異った方法」ということを強調したい——で、日本と肩をならべることができる、かれは語り、さらにつづけた。

われわれは、想定されうるいかなる条件のもとにおいても、連合王国がEECに加わることは反対だ。共同市場加入は、イギリスの鉄鋼業および石炭業をゆるがし、広大な地域は、棄てられた土地になってしまうだろう。「われわれが加入した日に、シトロエン、ルノー、フォルクスワーゲン、メルセデス、フィアットは、店じまいするだろうか。もちろんそんなことはない。かれらは、ここで販売台数をふやすだろう。われわれにとっては、加盟は、国家的破滅を意味する。われわれは、総選挙を要求しなければならない。保守党政府は、虚偽の公約にもとづいて選ばれた。かれらに国の利益を売りわたす権利はない。」

議長は、共同市場加入が地域政策に及ぼす影響について言及された機会をとらえて、スコットランド、ウェルズの選挙区党選出代議員に意見を求めた。高い失業率と産業の不振に喘ぐこれらの地域からきた、ケルトなまりの雄弁家たちのトップをきったのは、議会労働党内の頑強な賛成論者として知られるロバート・マクレン（ケイネス・サザーランド選挙区党）である。

ECは、今日スコットランドに存在する移住や後進性のような問題を、少くとも、イギリスと同程度に成功裡に処理してきたと、かれは主張した。これにたいして、ジム・シラス（下院議員・南エアシャー選挙区党）は、地域経済政策の成功には、資本の完全な統制が必要であるが、それはロー

マ条約のもとでは禁じられていると反論した。かれが、社会主義は資本の統制を意味するとのべたとき、ひととき大きな拍手が起った。

スコットランドのペアーが発言を終えたあと、ミカドゥは、ウエルズの加盟賛成者を求めた。賛成者は少いとみられていた。しばらく間があいた。やがて、若い代議員が、後尾の席から足ばやに演壇に近づいてきた。

「いたいた、よしこい」と議長がうながす。なごやかな笑いが起る。議長は、それに気をよくしてつづけた。加盟賛成のウエルズの同志には、ひとつの難問がある。「かれらがやらなければならないことは、ウエルズ語をECの公用語にしろと主張することだ。そうすればヨーロッパ人は、われわれのうけいれを望まなくなるかもしれない。」いったん収まった笑いは、爆笑にかわった。

笑い声がまだホールから消えさらないうちに、ドン・アンダーソン（モンマス選挙区党）がマイクrophonに近づいて、賛成演説をぶち始めた。ヨーロッパの社会主義者は、すでに共同市場のケーキを試食したが、食あたりに悩まされたことはなかった。われわれは、実際にある事実を認めるべきだ。大陸の仲間たちも、加盟前には、われわれと同じ疑惑を抱いていた。ところが、加盟後は、むしろ利益をみてとっている。

加盟問題では選挙はおこなわれそうにないと、かれが語ったとき、反対派の間から一斉に非難の声があげられた。それに応えて、かれはウエルズなまりの語調を一段とつよめた。「トーリーは権力が好きだ。だからできる限り長く権力にしがみつこうとするだろう。」政権の座にあらうとなかろうと、共同市場の外にとどまるならば、われわれは、活力にみちた大陸の成長からとりのこされ、国民は、生活水準の侵食にいっそう不満を訴えるようになろう。

アンダーソンにたいして、かれに劣らぬつよい語勢で反論したのは、ゴードン・ベリー（ペンブローック選挙区党）である。ヨーロッパ大陸諸国が、ケルト沿岸地方の貧しい経済をいかに脅かしているかを、かれは語気烈しく説明した。かれにとって、ヨーロッパは、西ウエルズの漁民にたいする致命的な脅威であった。

職権によって出席資格を与えられている下院議員の席は、会場が狭いため、ほんらいなら傍聴席になる二階のギャラリーにしつらえられている。選挙区や労働組合の代議員が、きゅうくつそうに体をよせあっている床席とちがって、ここにはかなりゆとりがみえる。かれらは、下院議場の場合と同様、足をのばし、楽な姿勢で「プロレタリア」の汗だくの論戦を見下すかっこうだ。

議長は、はじめてこの中のジョージ・トムソン(下院議員・職権代議員)を指名し、二階席最前列中央に設けられた演壇を使うよう指示した。上の演壇には、時間の制限を告げる黄と赤のランプの設備はないが、「床席のプロレタリアート」と同様、下の演壇にあるランプに注目するよう、議長は注意をうながした。各自の持時間は5分、4分たつと黄色ランプがつき、5分経過すると赤ランプにかわる。すると弁士は、10秒かそこらで討論をしめくくらなければならない。これは実によく守られる。トムソンは、先に少しふれたように、1967年労働党政府が共同市場へ加入を申入れた際の交渉当事者であった。かれは主張した。

誰一人として、理想的な条件が、われわれの前に提起されると信じたものはいないだろう。交渉にあたって完全な条件を期待できないことは、労働組合に属するものなら、だれでも知っているはずだ。条件は理想的とはいえないが、労働党内閣でも、これらの条件ならうけいれていただろう。労働党の中で直接交渉の任にあったものは、ほとんど全員、わたしと見解を同じくするだろう。

かりに、少し物価があがり、加盟費がたかくても、いまより五倍も大きい国内市場を考えれば、長期的には生活水準の向上に役立つ。討議にさいして、考慮にいれなければならないのは、次の世代のイギリス、かれらが生きていく世界のことである。

かれをはじめ賛成派の論拠は、保守党政府が白書で展開し、ヒース首相が、4日前、おなじ場所でひらかれた全国保守統一党連合臨時大会の席上、主張したそれと、実質的にはほとんどおなじであった。なるほど多くの賛成派の弁士から、社会主義的国際主義への忠誠が、異口同音に語られた。

しかし、それらは、そらぞらしいレトリックにすぎないように思われた。かれらの立場は、客観的にはイギリスのビック・ビジネスの意向と見通しを反映していた。

イギリスの財界は、1960年代のはじめから、一貫してEEC加盟を主張してきた。アメリカとの従属的同盟関係は、アメリカの経済危機の深化によって、ますます、魅力を失い、EEC加盟の代替物たりえなくなってきた。かれらにとって決定的な問題は、国内市場の狭さであった。イギリス資本には、ヨーロッパ大陸のより広大な「国内市場」が必要であった。同時にかれらは、共同体加盟によって、巨人アメリカと対等の立場に立ち、また、日本の猛攻に対抗する有利な地歩を築きうると考えた。もちろん、加盟が、イギリス資本のかなりの部門にとって、苦難を伴わないということではない。中小企業の多くが、倒産の危機に立されるか、乗っ取られるかする可能性は十分あるし、能率のわるい大企業にも、おなじ運命が待ちうけているかもしれない。相対的に衰退してゆくイギリス資本主義にとって、加盟の代償はけっして小さいとはいえないだろう。しかし、衰退を救うみちは、ほかに見出せなかった。このことが、たんに大資本のみならず、中小資本の大部分をも、加盟賛成の旗のもとに結集させた要因であった。労働党の加盟賛成派は、その社会主義的国際主義のレトリックにもかかわらず、実質的に資本の意図を代弁していた。かれらが共通に主張したのは、広い「国内市場」が導くであろう「高度成長」であった。

さて、トムソンの演説は、賛成派からの大きな拍手と反対派からののはげしい野次を浴びたが、議長は、ここで、高く右腕を差し上げ、登壇の機会を求めて身をのりだしている反対派の論客のなかから、たとえばマイケル・フットやピーター・ショーのような熱弁家を指名して、会場の雰囲気盛りあげることができたかもしれない。しかし、かれが反対派のなかから演壇に招いたのは、近く行われる補欠選挙に出る予定の、婦人候補ダイアナ・ジュダ（駿権代議員）であった。

「イギリスがEECに加盟すれば、どういう事態になるかの見通しについて、人びとは心配している。政府は、『大討論』をよびかけながら、事

実を隠している」と、かの女は主張した。そのあとをついだ賛成派ヘレン・ブラウンは、ブロンドの素朴な農民ふうの老婦人であった。「わたしの選挙区には、大政治家もいなければ、聡明な経済の専門家もない。自分たちは、平凡な黨員としてこの問題を考え、そして賛成することに決心した」と、かの女は語った。

そのあとをうけたのは、党のもっとも熱達した雄弁家の一人として知られる左派の開将、クライヴ・ジェンキンス(科学技術管理職組合)である。かれは、まず、賛成派の「国際主義」に反論した。

「われわれが運命をともにすべきだといわれるヨーロッパは、ばかばかしいほど狭小であり、広い世界のほんの断片にすぎない。ところで、それはどんな断片だろうか。欧州共同体は、政治的反動と不安定の温床である。反動的政府にがっちり握られているフランスは、過去10年間に二度内乱のふちに立たされた。言語と宗教の問題で割れているベルギーは、かたく結ばれたトラストによって支配されている。イタリアは、たえず右翼軍事クー・デターに脅かされている。これこそ、加盟賛成派があこがれるヨーロッパの姿である。」賛成派代議員から、非難の声があがる。ジェンキンスは、それに応えてさらにつづけた。「もしお望みなら、ドイツについていってもいい。われわれの仲間が、そこでもっている掌握力は、非常にはかないものだ。……そこには、壮大な政治的・社会的展望は全くない。われわれイギリス人が、わが国の諸制度をこんな汚濁のなかで危うくしてもいいのか。」

EEC内における国際企業の専横ぶりに触れて、ジェンキンスはつづけた。共同市場は、あきらかにこれらの大企業の利益にかなっている。「多国籍企業は、のこらず、われわれの加盟を望んでいる。そうだとすれば、加盟は、わが国の一般市民にとっていいことではない。」かれは、労働党ヨーロッパ支持委員会に、その経理を公開せよと迫りながら、フィアットやクルップの魔手が、わが党の内部にも伸びてきたのであろうかと問うた。反対派から喝采があがった。かれは、つぎの言葉で演説をむすんだ。「自分の面倒は、自分でみれる。ブリュッセルの官僚に支配されるより、われ

われはそれを選ぶ。」

トム・ネイルンが、あとで評した「いかさまの汎世界主義、そのすぐ裏にあるルンペン民族主義」が、そこにみられた。百万にのぼる失業者がおり、経済成長はほとんどゼロ、ロールス＝ロイスは倒産し、インフレは昂進し、労働組合は守勢に立っている。それらは、ほぼ一年前まで政権を担当していた「社会主義」労働党政府の諸政策の結果とみてもよかった。そして、おりしも悪名高い労資関係法案が成立しようとし、二週間後に、グライドの造船労働者は、労働者の大量解雇によって、産業を「合理化」しようとする国家の企図に反対して、工場占拠にのりだすことになる。しかも、半植民地戦争が、イギリスの主権国家内部でエスカレートし、ベルファーストやロンドンデリーの市内は、連日、軍用車と催涙ガスで充満していた。ちょうどそのとき、労働党左派の閣将は、わが国の主権を教えと絶叫していた。階級のまえに民族があり、国家があった。

さて、つぎは賛成派の順番のはずだ。ところが登壇したアンドリュー・マキントッシュ（ホーンジム選挙区党）は、かれの代表する組織が、この問題で賛否まったく相半ばしているため、明確な意見をのべることはできないとことわったあと、賛成、反対両派の主張の弱点を指摘した。

会場の中で、つぎの弁士、ジャック・ジョーンズ（運輸一般労組）の立場を疑うものは、だれひとりいなかった。かれは、イギリス最大の労組の書記長であり、一貫して加盟に反対しつづけてきた中心人物だからである。

「われわれは、組合大会でこの問題を論じたが、900人近い代議員のうち、わずかに4人が加盟賛成の立場をとったにすぎない。EECの構成国になれば、物価は高騰し、失業はふえ、イギリスの経済、政治、憲法上の独立は失われるだろう。このようなわが組合の見解は、うたがいもなく、労働党の過半数の党员を含む、大多数の一般国民の真の気持ちをあらわしている」と、かれは断言した。

「自分の組合には、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランスなどで働くものがある。それらの国では、生活費がびっくりするほど高いから、かれらは、特別の住居手当以外に、フランスでの週9ポンドからドイツでの週

10ポンドにいたる特別手当を支給されている。つっこんで検討すれば、E C諸国の労働者の賃金は、とうてい望ましいとはいえない。しかも共同市場に入れば、イギリスの労働者は、われわれの参加や承認なしに発効している3000もの規則にしばられることになる。」

もうひとつの巨大一般労組は、加入賛成派に属する一般都市労働者組合であり、それを代表して演壇に立ったのは、書記長フレデリック・ヘイデイである。かれは、またTUC総評議会の有力なメンバーとしても知られている。かれが、前のジョーンズに対抗して、「わたしもこの大会で、ひとつの民主的組織を代表している」とのべたとき、ドッと笑いが起った。かれは、それにかまわず発言をつづけた。「わたしの組織は、1962年くらい、イギリスのどの組合より熱心にこの問題を研究してきた。その結果、共同市場への参加は、わが国の経済を拡大し、成長率を高め、生活水準向上に手がかりを与えるだろうという結論に到達した。ただ、検討しなければならぬ新たな問題が、最近もちあがった。それは加入の条件である。わたしの組合は、昨日、終日討議を重ねた結果、ジョージ・トムソンの受諾可能という説明が妥当なものであるとして、全員留保なしにそれに同意することにした。」

フレデリックは、賛成の根拠をつぎのように要約した。「加入が、不振な経済をたちどころに活気あるものに変えるということではない。加盟は、イギリスの産業にたいして巨大な成長を遂げつつある市場に、無制限に接近する機会を与えるということ、……このことが、より多くの産業、より多くの仕事につうずるのだ。」代議員席から鋭いヤジが飛んだ。「そして、より多くの利潤！」フレデリックはひらき直った。「イギリス産業連盟は、利潤造出が商売だ。かれらは加盟後の見通しを検討したうえで、加盟の態度をきめた。」左派のおなじみの敵、イギリス産業連盟の態度が賛成論の根拠としてひきあいに加されたとき、ヤジは怒号に変わった。かれは、ひるまずやりかえした。「われわれは、イギリス産業の中で生活の糧をえているのじゃないのかね。イギリスの産業が、イギリス産業連盟に握られているとしても、それはこの国の有権者の責任であって、わたしの責任ではない。」

イギリス独占資本への無条件の追随、かれほど率直に、賛成派の立場を表明したものはいなかった。

#### 四

賛否の討論が、規則正しく交代する。決定ぬきの討論会。そのせいか、時間の経過とともに、倦怠感が、次第に会場を支配していく。人の出入りが繁くなり、空席が目だちはじめた。拍手や歓声の量では、反対派が賛成派を上廻っている。にもかかわらず、反対派にとって、議事の経過は、けっして満足すべきものではなかった。キャラハンが、反対派の労働組合と取引きしたとき、執行部ステイトメントの支持とひきかえに、党首ウィルソンが、締めくくりの演説で、これまでにない強い調子の加盟反対演説をおこなう旨の言質を与えた、という噂が流れていたというが、それを耳にしていたものは少なかった。

しかし、午前の討議が終る少しまえ、ムードは一変した。反対派の有力な弁士、ピーター・ショーが、得意の熱弁をふるって、反対派を優位にたてさせたからである。長身瘦躯のショー（下院議員、職権代議員）は、神経質な顔をマイクロフォンに思いきりちかづけてまくしたてた。たかぶった感情が、鋭い声となってドームにこだまする。私語は止んだ。

条件は、わが国民にとってじつにぞっとするほど悪いと、かれは断言した。「なぜなら、われわれが迫られているもの、それは、120年の歴史をもつ低食料政策の放棄だからであり、伝統的な安い食料供給者から、非効率な西欧の農民へのきりかえだからであり、欧州自由貿易連合と英連邦からの離脱と、イギリスの貿易のわずか20パーセントを占めるにすぎない第三のクラブ、共同市場への加入だからであり、1939年くらい、はじめてみとめられるイギリス資本の西欧への移動だからである。」

しかも、労働党政府が、交渉に失敗したあと、新しい重大事態が発生した、とかれは強調した。フランスの使節によって、1970年はじめにとりきめられた6カ国共通農業政策を、イギリスは、交渉の前提条件として、うけいれねばならなくなった。これによって、とてつもない重荷が、われわ

れの肩にのしかかってこよう。共通農業政策は、イギリスの参加にとまらう5年の過渡期が終ったあと、1年4億ポンド以上、そしておそらくは7億ポンドにもものぼる負担を、わが国の支払勘定に加重することにならう。これは、1967年にはなかったものだ。6カ国、とりわけフランスは、自分にとってきわめて好都合で、われわれにとって非常に不利なこのとりきめを確立し、強化するまで、イギリスの排除を主張しつづけた。

共同体加盟が「外国の陰謀」だというのが、反対派の主張に共通するひとつの論点であった。かれはつづけた。政府白書は、国際収支への負担、そこから不可避的に生ずるディフレ、地域政策へのしわよせ、成長率や生産高への打撃を、明確に説明していない。参加が、繁栄をもたらし、成長率を押し上げるというのは、まぎれもなく嘘である。

割れるような拍手を制して、かれはこう結んだ。「諸君に、自分自身の問題を解決する能力がないと信じこませようとする弱音に、うちひしがれてはならない。おそれることはない。諸君には、このバカげた行為をやめさせ、わが国の歴史を変え、——イギリス産業連盟やエドワード・ヒースのためではなく、イギリス国民のために——未来にむけて、正しい政策を採択できる力がある。」

ショーの烈しい、告発調の熱弁が終ったあと、一人おいて演壇に招かれたのは、トム・ジャクソンである。立派な口髭をたくわえたこの郵便労組のリーダーは、大会のなかで、だれよりも複雑な立場に立たされていた。自分自身は加盟に賛成であるが、執行部をその立場で説得できなかったかれは、開会直後、絶対反対派の執行部ステイトメント撤回動議をつぶすのに一役買っていた。そしていま、かれは、壇上から加盟反対演説を試みようとしている。語調はおだやかであった。しかし、かれは、立派に課せられた任務を果たした。

わたしの組合は、いま示されている条件、そして現在の状況のもとでは、加盟に反対だといわざるをえないと、かれは語った。過去25年間に、わが組合員の生活水準は、国際収支の破綻のために、たえず改善を妨げられた。そこで、われわれは、経済に及ぼす影響という観点から加入条件を検討し

た。その結果、われわれにかんするかぎり、加入の代価は、あまりにもたかすぎるといふ結論に到達した。われわれには、いまの困難を、加入からくる他の困難とおきかえる意図はない。われわれは、75万の失業者を放置している階級的偏向にみちた政府を信頼することはできない。政府白書には、事実や数字は、ほとんど示されていない。水晶球が政策の道具になっている。われわれは、臆測で政府に服従を強いられている。郵便労組は、まずなによりも、政府が現在の失業や成長の欠如という症状を治癒することを要求する。「イギリス国民は、痛み、疲れ、わが国民を分裂させようとする政府にうんざりしている」と、かれはむすんだ。政府が、国民を分裂させているという論点は、のちにウィルソンのとりあげるところとなった。

このあと、防衛問題や第三次世界大戦の危険について、ダン・マクガーヴィー（合同ボイラー工組合）とアーサー・ボトムリー（下院議員、全国公共労組）の間で、論戦が交えられた。マクガーヴィーは語った。世界平和について多くのことがいわれたし、今後もいわれるであろう。しかし、慎重に考えねばならないと、かれは警告した。将来、ドイツに右翼的な政府が復帰すれば、ドイツの指が核の引金にかかることもありうる。そのとき、イギリスが欧州共同体に加盟していたとすれば、われわれは、第三次世界大戦に巻きこまれることになるだろうと。

ボトムリーは、この主張に反論した。戦争の可能性は、イギリスが加盟しない方が、むしろ大きくなる。ドイツは、過去2回、ヨーロッパの経済、社会を支配しようとして、失敗した。今度は、ドイツが平和的手段でヨーロッパを支配するのをゆるそうというのか。そうなれば、支配は、経済、社会資源の収奪にとどまらないだろう。これこそ、ドイツ以外の共同体構成国が、わが国の参加を望んでいる理由であると。

ショーが熱っぽくかもしだした会場のはりつめた雰囲気、やや緩みそりにみえた。しかし、派手な黄色のシャツに、同色系のネクタイを締めて、午前の討論のしんがりをつとめた反対派のアンソニー・ジャッジ（サーバイトン選挙区労働党）は、ニーモラスな演説で、会場の活気をとりもどし

た。

わたしは、賛成派の主張から多くのことを学んだ。わたしは、加盟支持のすばらしい文書を残らず集めた。「ただし、1973年1月7日づけのわたしの特別手当、7ポンドの計算書はまだである」と、かれは満場を笑わせた。わたしは、加盟賛成者の議論の多くに、敬意を払うにやぶさかではない。しかし、なかには、ナンセンスな議論もあると、かれは語り、まず冒頭に演説したヘニグの「国際主義」を槍玉にあげた。ほんとうに、かれが国際主義者で、ピアフラ、ベトナム、ローデシア、南アフリカにたいする関心が、共同市場への参加によって強まるというなら、どこの国が南アフリカに武器を与え、どこの国がローデシアの承認にやっ気になっているかを、親切に教えてくれてもよかったはずだと、かれは皮肉った。

つづいてジャッジは、ボトムリーに噛みついた。「かれは、統合ヨーロッパが、イギリスを欠くなら、EECは、第三次世界大戦を導びき、ドイツの経済支配をゆるすだろうと語った。来賓として列席しているドイツの仲間たちは、これを聞いて、だれが国際主義者であるかをいぶかったに相違ない。」

「わたしは、あくまで加盟に反対であるが、賛成派の弁士のなかに、情勢は変わった、中米帝国主義ブロックの脅威に対抗するため、欧州共同体に参加しようと主張するものがいてもよかったのではないかと、かれはひやかした。

わたしの反対の根拠は、基本的には「犯罪的な農業政策」にあると、かれは主張した。それは余剰食糧を高値とむすびつけるからだ。飢えた世界のなかで、そういう政策は、「不潔」というほかない。イギリス人はひとりだちできないと、わが国民にいった最後の人間は、アドルフ・ヒトラーだった。われわれは、そのときと同じ国民である。「わたしは、なんの目的もなく、6年間バナナをもたずに学校に通ったわけではない。」どっと笑いが起った。加盟の代案は、政治的にも、経済的にも、財政的にも社会主義的な計画に専念する社会主義の政府を樹立することだと、かれは結んだ。

## 五

午後2時、討議が再会された。ドームの下には、午前の終りに、ショーとジャッジが醸した活気ももちこされていた。昼休みがなかったかのようであった。しかし、最初にマイクロフォンにむかったニコラス・ボサンケット（ハムステッド選挙区党）は、みずから中途半端な賛成派と名乗っただけに、その論調には迫力がなかった。

つづいて登壇したのは、労働党法律家協会のロジャー・エヴァンスである。かれが、法解釈の専門家として、ローマ条約には国有化を禁止する文言は、ひとことも見当たらないとのべ、反対派には条約にかんする初歩的な知識を欠いた議論が多すぎると攻撃したとき、反対派代議員から、一斉に怒号が浴せられた。

議長がこれを制した。「演壇にいるものをどなりつけるのはやめてほしい。法律家以外に、ローマ条約をまじめに読んだものがないといういいぶんを、容認できない気持はよくわかる。だからといって、どなりつけていいわけではない。」

賛否両派の対抗意識をいやがうえにも盛りあげたのは、エリック・ヘファー、そしてとりわけ、この日の討議の白眉ともいえたジョン・マキントッシュとマイケル・フットの火花を散らす論戦だった。

リヴァプールのウォルトン選挙区を代表するヘファーは、下院のフロント・ベンチャーでもある。かれは主張した。「われわれが当面している問題は、根本的には、なにが社会主義を実現する最善のみちか、ということである。かつて、わたしは、イギリスの共同市場参加によって、国際的な社会主義欧州を実現できると信じ、げんにそう明言したこともある。しかし、いまはそう信じない」と、かれはいった。「わたしは、前の週に見解を変えたのではない。前回の総選挙のまえ、1970年4月に、EECで現実にかつたことがらを綿密に分析したうえで、わたしは立場を明確にした。」

1969年のEC関係会議の決定は、イギリスが共同体内部で、社会主義的変革を実現するみちを鎖した。われわれは、他のだれよりも、イギリスの

労働者階級にたいして責任を負うべきであるが、かれらは、加盟によって大きな打撃をうけるだろう。「わたしは、国際社会主義を信じる。しかし、国際社会主義の大義が、現段階で、またいかなる段階でも、EEC加入によって、もっともよくなえられるとは信じない。われわれは、社会主義イギリスの建設に専念すべきである。確信をもたねばならない。われわれは、社会主義イギリスを建設する自己の能力を信頼すべきであり、なにか、外部の万能策をあてにしてはならない。」

議会党幹部のこの演説は、会場全体から嵐のような拍手を呼んだ。しかし、少数派でありながら、それに劣らぬ喝采を博したのは、二階席でじりじりしながら指名を待ち、ようやく発言の機会をえた賛成派の下院議員マキントッシュの演説であった。

日頃はおとなしいといわれるマキントッシュは、この日は最初から詰問調になった。かれは、まず、朝の討議の立役者であったピーター・ショーに鋒先をむけた。「ピーター・ショーの立場は、最近、なにか非常にあたらしいことがもちあがったという立論に依拠している。それについて明らかにしようではないか」と、かれは迫った。「ショーが言及したおもな点は、すべて1967年に、労働党内閣が加入を申入れたとき、すでに存在していた。そのことについて、絶対的に正直でなければならない。ショーが触れた唯一の変化——共同体財政への拠出金制度——は、1969年12月にきまった。にもかかわらず、労働党内閣は、1970年5月に、再度参加申入れをした。それは軽薄な申入れではなかったはずだ。それは兎戯に類することではなかったはずだ。それは真剣だったのだ。」

「去年の5月から今日までの間に、ショーやヘフアーがのべたような根本的变化が起ったとは、到底信じられない。わたしをいらだたせるのは、いまになって、参加条件が欺瞞だなどと論じられることであり、加入によって、イギリスの経済成長がもたらされると信じることが、なにかインチキであるかのようにいわれることである。」かれは、ここで一段と声を張りあげた。

「ピーター・ショー、かれ自身、当時の経済問題担当相だったではない

か。……かれは覚えているのか、——かれは、わたしと同じ世界に生きていたのであろうか。——かれは、われわれがどうコースから吹きとばされたかを説明しなければならなかったことを、ほんとに覚えているのか。かれは、強いられた通貨の切下げを覚えているのか。かれは、国中を説明に廻らねばならなかった節減やディフレを覚えているのか。現状の情勢にかんして、絶望的なほど消極的で島国根性的な態度をとるなら、次期労働党政権にさいして、あのような状態に復帰しなければならなくなる。」

ついで、かれは、ヘファーに攻撃のむきを変えた。詰問調がなおもつづく。社会主義のスローガンをふりかざすだけではだめだ。「わが労働党政府。——それには、社会主義者がいなかったというのか。かれらは、一定の枠内で努力をしたのではなかったか。われわれは、自分自身の運動にむかへて、『つぶしてしまえ』とか、『拒絶しろ』とかいうわけにはいかない。……もし、イギリスが、すべての共同体構成国が享受してきた成長を、一年でも経験していたとしたら、われわれは、いまでも当然、政権にとどまっていたであらう。」たしかに、かれの主張は、反対派の「民族主義的社会主義」の路線の空虚さを衝いていた。

かれは、なおも追求の手をゆるめずつづけた。ヨーロッパの社会主義仲間には、いまでは、なんの疑念もなく、共同体をうけいれている。「二週間前、ローマでイタリア共産党の一指導者と話しあったとき、わたしは、もっとも有力な証言を耳にすることができた。わたしはかれに質した、『あなたは、EECが資本主義の陰謀だと思いですか。』すると、かれは、肩をすくめてはっきりといいきった。『もとはそう考えていた。しかし、いま、EECに敵対するには、それは、イタリアの労働者階級のために、あまりに多くのことをやりすぎた』と。」

この小話は、マキントッシュの演説のなかで、もっともうけた箇所であった。そのことは、拍手の量で知られた。総じて、マキントッシュの演説は、この日、賛成派が試みたもっとも強力、かつ効果的なスピーチであった。

議長ミカドゥは、ここをこの大会の最高の山場にしようと思図したに

ちがない。かれは、雑壇中央の高みから、脊筋を伸して会場を見渡しなが  
ら、むしろ押し殺し気味の声でいった。「ケンカ嫌いの弁士のあとには、  
……」満場に爆笑が起る。「もう一人のケンカ嫌いの弁士をもってくるの  
がよかろう。マイケル・フットを指名する。」反対派代議員の中から、ドッ  
と歓声があがり、割れるような拍手が起った。

あかるいブルーのシャツの袖をまくりあげ、度につよい眼鏡の底に射る  
ような眼を輝やかし、長い銀髪をたてがみのようにふりみだしたこの左派  
の閣将の顔は、演説が進むにつれて、みるみる紅潮していく。もともとす  
るとい語調が、それにつれてかん高くなり、ついに金切り声に変る。「現  
在の政治情勢の中で、もっとも憂うべきことは、ときどき、人びとが——  
この中にも、それに同調するものがあるが——あたかも、この大問題がす  
でに解決され、署名され、押印され、交付されてしまつて、この偉大な大  
会、偉大な労働党の運動が、それについてなにもできないかのように語っ  
ていることである。」

「わたしは、こんなことを容認しない。とりわけ、呑むことを求められ  
ている国際収支への重荷、5億ポンドを考えればだ。わたしはディフレ  
を覚えている。1966年を覚えている。労働党が悩んだ一切の問題を覚えて  
いる。これらの問題にたいして、ジョン・マキントッシュより、もう少し  
懸命に取り組んだ人びとのことを覚えている。」歓声とはげしい拍手。「わた  
しは、かれにこう告げてやりたい。労働党政府が取組まねばならなかった  
主たる困難は、破滅的な国際収支の赤字であったのだと。しかるに、かれ  
は、この重荷に、まだ5億ポンドのうわのせを提案しているのだ。」

拍手が高く、つよくドームに鳴りひびいた。それは、マキントッシュへ  
の拍手をはるかに凌駕していた。反対派は溜飲をさげた。拍手が鎮まらな  
いうちに、かれの舌鋒は、他の問題にむいた。われわれは、資本の自由な  
移動を承認し、共通農業政策を承認しなければならなくなる。この農業政  
策について、賛成派はだれひとり、弁解しようとさえない。鉄鋼につい  
ても、もし加盟すれば、イギリスの鉄鋼業は、40億ポンドの発展計画を遂  
行できなくなる。

付加価値税はどうだ。前回の総選挙宣言のなかで、「われわれは、付加価値税に反対だ。それは、反動的、時代逆行的な税だと考える」とのべた。ところが、共同体に参加すれば、イギリス国民は、なんらそれに反対する権限もなく、付加価値税をうけいねばならない。「これは憲法問題である。いうまでもなく、この種の条項をうけいれるなら、わが議会主権は掘りくずされる。これは一例にすぎない。」議会主権——イギリス民族のエッセンス、それが侵害されようとしている。反対派の主張に、またしてもあらわれる民族主義。かれの弾劾はつつく。

「われわれは、まだ、この市場に参加しているわけではない。われわれにはイギリスの将来を決める権利がある。もし、われわれが加盟反対の態度をきめれば、わが国の大政党、労働党とトーリー党——かれらは、加入の委任をとりつけていない——の間にくいちがいが生じよう。その間の結着をつけるのは国民である。このことが、かつて、ゲイツケルとわたしが同意し、わが党の団結が強化されたポイントである。」笑いがひろがり、拍手が湧く。たしかに、フットの率いる左派トリビューン・グループは、この問題では、かつての仇敵、前党首ゲイツケルの流れを汲む右派の一部と、同一の立場をとっていた。ナショナル・インタレストのまえに、階級の視点が失われていた。それが、両者の同調の謎を解く鍵のように思われた。

「議会のつぎの会期の重要問題は、EEC加盟の是非である。そして、むろん、われわれは加盟を阻止できる」と、フットは断言した。イギリス民主主義の要請、選択の権利を確保するまで、加入のために必要な山のよ様な法案を、われわれは立往生させることができる。加盟推進者、トーリー党に、イギリス国民を説き伏せる自信があるなら、「イギリス国民自身に決定させよう」となぜいえないのか。国民自身に決定させる、これこそ、労働党が闘うべき目標である。場内をゆるがす、烈しく長い拍手の波。

拍手が鳴りやむのを待って、議長が口を添えた。昼休みの一杯のおかげで、ねむ気を催していたものにも、オリンポスの山からの二人の演説は、いいねむ気ざましになったことだろう。「さて、わたしは、賛成派の労組代議員を期待する。だれかいらないか」と議長はうながした。しかし、しば

らくはフットの熱弁につづくものがないかにみえた。床席から、「だれもいない」と呼ぶものもいた。化学労組のポップ・エドワードが、やっと演壇に歩みよった。まえの演説とはうって変わった、もの静かな調子であった。

それからほどなく、ヒュー・スキャンロン（合同機械労組）が演壇に招かれた。かれは、運輸一般労組のジャック・ジョーンズとともに、絶対反対派の重鎮であるが、風貌もかれとおなじく、大労組の闘士というより学者ふうにみえる。かれは、いくぶん不気嫌そうであった。「招きにお応えできればよいが、早々におこなわれた決定のせいで、わたしは気のりがしない」と、かれは語り始めた。わたしは無意味な予行演習になんの目的も見出せない。決定をくだすために大会を招集するか、あるいは、大会など招集しないかのどちらかであるべきだったと、かれは不満をぶちまけた。ヒヤヒヤの声と大きな拍手が起った。

かれは、最後に永年にわたる党内の対立点であった、「大会決定が、どこまで議員の態度を拘束しうるか」という問題をもちだした。政府側は、すでに所属議員の自由投票を禁止する措置をきめた。もし、労働党が、議員に自由投票を認めるなら、多数派トーリー党をますます増長させる結果になるだろう。いまこそ、執行部は、加盟反対の決議案とともに、党大会の決定が、議員全員をふくむ全党員を拘束するのだという決議案を準備するよう、心から期待すると、かれはむすんだ。もちろん、反対派代議員から、大きな賛同の拍手がよせられた。

一人おいて登壇したレグ・サルマン（反対派、エドマンズ・バリー・ストリート選挙区党）は、クルップ一族、フォン・ティッセン、あるいは、イタリアの地方選挙で2000の議席をとったファシストが、イギリスにおける事態の進行に発言権をもつことを、到底ゆるすわけにはゆかないと力説した。

賛成派は、午後の討議では押され気味にみえ、氣勢はあがらなかった。しかし、議長は、依然として交互に賛否の意見を求めつづけた。

賛成派の繊維労組のジャック・ピールは訴えた。少くともわが組合員に

かんするかぎり、中期および長期の見通しでは、加盟から利益をひきだしうるだろう。問題なのは、生活水準であって、それを生活費と混同しないで欲しいと。

反対派のスタン・オーム（下院議員、サルフォード・ウェスト選挙区党）は、労働党が、社会主義的回答と代案を示さないなら、イノック・パウエルのような人物が、反対運動を指導する羽目になろうと警告して、大きな拍手をあげた。一部でファシストと評されたパウエルの人気は、一、二年前ほどではなくなっていた。かれは、独自の国粹主義から加盟に反対していたが、保守党のなかで、かれに追随したものは、さほど多くはなかった。

イギリスの夏の日には長く、陽はまだ高かった。しかし、議場にはようやく疲れの色がただよいはじめ、私語のざわめきが、弁士たちの声を聞きとりにくくしていた。議長は、会場の空気を、もう一度締めなおそうとして、前労働党政府の閣僚だった賛否両派の「ヘビー・ウェイト」を指名した。

まず、かつての外相マイケル・スチュワート（下院議員、職権代議員）が登壇した。「加盟によって、むろんすべての問題が、解決するわけではない。わたしがいいたいのは、外にとどまるよりも、中に入った方が、イギリス国民にとってチャンスが多いということだ。これが真の論点だと思う」と、かれは説いた。

加盟を拒否すれば、「わが国とヨーロッパ諸国の産業能率の差は、年々拡大していくのではないか。国際収支は、ますます悪化するのではないか。『われわれには、欧州自由貿易連合があり、英連邦がある』ではすまされない。世界はけっして静止していない。かりにわれわれが参加を拒んでも、英連邦諸国は、つぎつぎに欧州共同体と独自の貿易上の協定を結ぶだろう。一連の諸国は、すでにそういう協定を結んでいる。欧州自由貿易連合についても、同様のことがいえる。この点をピーター・ショーは、計算にいれなかった。」

かれが、もう一言と断りながら、エドワード・ヒースについて意見を述べはじめたときである。黄色ランプは消えて、持時間の終りを告げる赤ランプがともっていた。議長が注意した。「マイケル、ランプがともってい

る。」スチュワートは、それを無視するかのように、なおも発言を続けた。議長ミカードゥが、大音声でどなった。「わたしには発言をやめさせる権利がある。」こういふと、かれは、容赦なくマイクロフォンのスイッチを切った。スチュワートは、当然うけるべき支持の拍手を失った。ところが、雑壇からひとり静かに拍手を送るものがいた。副党首であり、賛成派の総帥であるロイ・ジェンキンスであった。

かれは、前党首ゲイツケルの模範生であった。しかし、この問題については師の反ヨーロッパ主義に組せず、EC加盟論を頑強に保持してきた。朝の決定によって、かれの地位はしばらく保証されたものの、早晚、副党首の地位を失うだろうというのが、大方の観測であった。かれは、その意味で時の人であった。内外の注視のなかで、かれは、それまでほとんど賛否の演説に反応を示すことなく、いささかも憂げに、雑壇の一角から会場を見おろしていたのだった。

スチュワートにつづいたのは、一貫して加盟反対の態度をとりつづけてきた前貿易庁長官のダグラス・ジェイ(下院議員、職権代議員)である。かれはのべた。「1962年と1969年に、労働党が求めた共同体加盟にかんする一切の防護策は、捨てられた。リボンとヒースは、ローマ条約全体、そのもとでつくられたすべての規則、そして反動的な共通農業政策を、わが国にたいする破滅的な影響もろとも丸呑みした。不正直な政府白書は、適切な数字を省略し、その残りにも脚色をほどこした。にもかかわらず、白書は、店頭の商品価格が20パーセントがた値上りし、名目賃金はそれほどあがらないことを認めている。つまり、イギリスの賃金労働者、俸給所得者の生活水準は、下落するということである。これこそ、イギリス産業連盟とロンドンのシティが、あれほど熱心にヒースを支持している理由である。」大きな拍手が湧いた。

この一対の演説が、終局の山場であった。論議はなおも続いた。しかし、もはや盛りあがりは見られなかった。私語は、ますます声高になった。ヒッピー・スタイルの青年、グラーム・ルームズ(ランベス・セントラル選挙区党)の加盟反対演説を最後に、論議の幕は閉じられた。

議長イアン・ミカードゥの毅然とした、公平な、そしてユーモラスな大会統制下に、欧州共同体加盟問題をめぐる党内の意見は、ほぼでつとした観があった。かれは、結局24人の賛成者と25人の反対者に発言の機会を与えたことになった。党内に占める比重からみれば、賛成派は反対派よりも利益を蒙わり、選挙区党は労働組合より優遇されたいといえる。しかし、賛否のバランスのとれた組み合わせは、党の統一を至上命令とするウィルソンら執行部多数派の意を体した、議長の意識的な配慮を物語っていた。

ところで、この問題をめぐる党内情勢に特徴的だったのは、賛否の対立が、伝統的な左右の対立という図式では、説明できなかった点であった。たしかに、賛成派は、ほとんど全員右派の陣営に属する人物であった。しかし、右派の相当部分が、左派と合体していた。とりわけ、右派の古参党員にその傾向がつよかった。また、伝統的に左派が優勢な選挙区党部門で、意外に賛成派が多かった。とくに、地方組織で次第に勢力をえつつあるといわれるミドル・クラスの新党員の中に、その傾向が著しかった。ある評論家は、左・右の対立にかわって、新・旧の対立という視点から党内情勢をみるべきだと、のちに解説した。

## 六

いよいよ、ハロルド・ウィルソンが、党首の立場で特別大会に締めくくりをつけるときがきた。7月7日の政府白書発表直後のテレビ演説では、明確な賛否の態度を保留したウィルソンは、この大会では、予想以上に加盟反対に傾斜した論陣をはった。

かれは、まず、きたる7月28日の全国執行委員会にたいして、明快な提案をおこなうのは、党首としての義務であり、そのさい、今日ここでのべられたすべての意見を考慮にいれるであろうとのべた。

つづいて、かれは、過去数年間の労働党の欧州共同体にかんする政策を、代議員に想起させた。党の政策は、政権担當時も、今日も、なんら変りはない。昨年の大会でも、条件さえ正しければ、イギリスは、共同市場の挑戦をうけとめる力をもっているし、条件がまちがったものであれば、むし

ろ外にとどまって、自分の足で立つべきであり、また、イギリスには、その能力があるとのべたはずだと、かれは強調した。

7月28日の全国執行委員会で立案され、10月の年次大会で決定される政策は、過去4年以上にわたって、党が一貫して主張してきたことと完全に一致するものとなろうと、かれは告げ、次第に語気を強めながら、どんな条件がでてこようと、それを呑まねばならないという意味に解されるようなことを、わたしは一言たりともいった覚えはないと断言した。われわれは、将来の利益という点に照して、加盟条件を判断する権利を留保したし、今後もそうするであろうと、かれは続けた。ウィルソンは、かれのこの問題にたいする態度が首尾一貫しておらず、日和見主義的だという内外の批判を、あきらかに意識していた。

「どこからいわれるのであれ、現在の保守党政府が手にした条件は、労働党政府が求めた、——そして、われわれは、実際には、交渉にいたらなかったのであるが、——労働党政府が求めたであろう、あるいは労働党政府がうけいれざるをえなかったであろう条件である、などといういいぶんを、わたしはきっぱりはねつける。」「われわれが、1967年7月の労働党政府白書のなかで、詳しく説明し、事実、ヨーロッパにたいしてあきらかにした条件は、いま議会に出されようとしている条件とは違っている。この事実を知るものが、それとはちがったふうに主張するのは無責任である。」反対派の陣営から、歓声とはげしい拍手が起る。

このくだりは、固有名詞こそ挙げなかったが、かつてのヨーロッパ担当相、ジョージ・トムソンにたいする非難であることは、だれの耳にも明らかであった。同時に、それは、前外相マイケル・ステュワートらにたいする叱責でもあった。

労働党は、4つの大条件を出していたと、ウィルソンは、順を追ってそれらを説明した。

第一の条件は、加盟の得失の評価に絶対に欠くことのできない国際収支にたいする負担である。ところが、保守党政府は、負担が全部でどれほどの規模になるかを、見積ることを拒んでいる。1967年当時、労働党政府

は、それを年2億7,500万ポンドないし3億5,000万ポンドと踏んだ。それ  
 くらい、共同体の規則は、根本的に変わった。現政府がもちかえった条件か  
 らくる負担は、労働党が1967年に評価した額を、大幅に上廻ることはまち  
 がいない。三週間前の新聞に、5億ポンドという数字が出ていた。政府は  
 否定しているが、新聞は政府筋からえた数字だと明言している。「神のは  
 かりごとを暗くするという目的のほかに、白書に数字を公表しない理由は  
 なにか。なぜ、政府は、イギリス国民が、共同市場への加盟の得失につい  
 て、その見解を定めるのに必要な情報を提供しようとししないのか。」

第二の重大な条件は、むろん、資本移動の問題であると、かれはのべた。  
 労働党の政権担当中に、イギリスが数年来かつてなかった大幅な国際収支  
 の黒字を手にしようとしたとき、われわれは、一、二のもっとも悪質な投  
 機的資本移動に直面した。当時、イギリスは、そのような無責任な動きに  
 対処しうる防護措置をもっていた。ところが、交渉者リポンは、この防護  
 措置を売りわたし、わが国の準備金、雇用状態、投資能力を危殆に瀕せし  
 めた。

第三の条件は、英連邦の砂糖の問題であると、かれは説いた。20年以上  
 まえ、労働党政府のもとで、英連邦砂糖協定が結ばれた。それは、生産者  
 にたいして、英連邦の広大な地域に、保証された価格で、安定した市場を  
 提供した。労働党は、政権担当中も、その後も、英連邦の生産者は保護さ  
 れなければならないと、主張しつづけてきた。ブリュッセルからもちかえ  
 られた条件は、EC6カ国にかんするかぎり、そのような保護措置を含ん  
 でいない。

第四に、ニュー・ジーランドとの貿易の問題があると、ウィルソンはの  
 べた。「わたしは、本日、ヨーロッパについて発言したどの人の誠実さも  
 も疑っていない。どうか、わたしの永年にわたる英連邦、とりわけニュー  
 ・ジーランドにたいする執心を疑わないでほしい。」ニュー・ジーランド  
 の安い食料品は、イギリスのすべての家族の生活水準に不可欠である。  
 「ニュー・ジーランドの産物が、保証された、持続的な基礎のうえにイギ  
 リスに入ってこないとすれば、わたしは、労働党内閣にたいして、共同体

への加盟を勧めはしなかつたらう。」保守党政府の条件下では、今後5年間、バターとチーズの輸入は漸減していくことになるが、そのあと、対ニュー・ジージランド貿易にかんする長期のとりきめは、なにもない。「わたしのみるところでは、保守党政府は、他の条件をえようとあせるあまり、ニュー・ジージランドの利益を裏切り、その点では、イギリスの利益を裏切ったのだ。」

よきヨーロッパ人たりうる資格は、大きな犠牲を払って、非能率にたいして補助金をくれてやることだとか、ヨーロッパにおけるより大きな政治的統一という非常に好ましい目的は、フランス農業にたいして、約5億ポンドにもぼる補助金を負担するのでなければ獲得できないなどという主張を、わたしはうけいれることはできないし、またうけいれた覚えはない。

リボンがもちかえた条件は、イギリス政府が、現在の状況下で獲得しうる最善の条件であるといわれている。しかし、それは、われわれにとつて、けっして十分満足のいく条件ではない。諸君は、全権大使が最善を尽したかどうかによって、かれを評価するのではない。かれの最善が、十分満足のいくものであるかどうかの問題なのだ。ウィルソンはつけ加えた。「もし、労働党の交渉当事者が、保守党が満足したような基礎にたつて、交渉のこの重大な部分を取扱おうとしたなら、わたしは、それを後押ししなかつたらう。」

ウィルソンは、4大条件をこう説明したあと、雇用、賃金、国民生活とかかわりのあるその他の問題に言及し、漁業、地域政策などにたいする加盟の影響について触れ、さらに防衛問題に説き進んだ。

「わたしは、ヒースの共同市場観には、労働党の加盟支持者が、だれひとりもたないような見通しが隠されているのではないかと疑う。かれのヴィジョンは、経済的統合や政治的協力をはるかに超えている。たとえ、かれが、いま政治的理由から、これに口をつぐんでいるにせよ、かれのヴィジョンが、わが党のだれひとりして容認しない防衛上の統合をふくむヨーロッパであることを、かれは繰返し明らかにしてきた。昨年まで、かれは、終始、ヨーロッパ内部における核兵器のプールを主張していた。

もし、保守党の政策が、ドイツを含む統合ヨーロッパの一部に、核をも入れるものであるなら、東西ヨーロッパ間の建設的和解は、失われるであろう。いまこの瞬間、われわれがかつて知らなかった地平が、ひらけつつある。最近、ソ連は、従来の政策に再検討を加え、東西間の緊張緩和をはかる新たな動きを示し、ワシントンと北京の昨日の発表は、新しい希望をひらいた。ところが、ヒースは、依然として、冷戦という不毛の用語で、かれの言葉を綴っている。」

そのあと、ウィルソンは、労働党が今後迎べき行動過程に話しのむきを変えた。かれは、寛容で同志的な討議によって、明快な決定に到達するよう希望をのべ、党の統一を訴えた。労働党は、保守党とともに、そしてまた、イギリス国民全体を反映して、この重要な政策上の問題で割れている。いずれの側も、この問題に真剣にとりくんでいる。わたしには、全党員の名誉と見解を尊重する方向で、この討論を司どる権利と義務がある。そして、討論が、明快な決定によって終止符を打ったとき、労働党は、統一ある、強力な立場で、保守党政府にたいする断乎たる攻撃を、国中に展開しなければならない。」

かれの保守党政府弾劾の語調は、予想以上にきびしかった。かれは主張した。労働党の態度は首尾一貫している。これにたいして、保守党は、もっともひとをバカにしたやり方で、その態度を変えた。ウィルソンは、自分にむけられた批判の矢を、保守党政府にむけかえた。昨年保守党選挙宣言は、たんに、「われわれの唯一のしごとは、交渉であって、それ以上でも、それ以下でもない」とのべたことを、かれは想起させた。

1970年にほとんど触れられなかったことが、1971年には、条件いかにかわらず、それなしでは生きてゆけないなどといわれている。その理由は、一体なにか。国民には知る権利がある。加盟は、唯一の途ではない。ところが、そうだと説くことによってイギリスを裏切っているのは、ヒースである。かれは、この重大な決定が必要とする分別あるアプローチではなく、狼狽とヒステリーのなかで、決定を強行しようとしている。

長い演説が終ると、烈しい拍手が、いつまでも鳴りやまなかった。ウィ

ルソンは、条件が問題だといった。そして、その点で、労働党の立場は一貫していることを強調した。しかし、かれの演説は、条件の是非を超えて、保守党政権下での加盟そのものに反対であるかのようにもうけとられた。1967年当時、めぐまれた政治的立場と、党内の比較的穏やかな状況のもとで、ウィルソンは、労働党を率いて、この運動をナショナル・インタレストと調和させつつ、欧州共同体に引き入れることができると考えた。ところが、1971年の政治的に追いつめられ、党内対立が激化した状況下では、むしろ、労働党は、旧来の民族的社会主義という、伝統的な、より安全な途にとどまる方が、得策だと考えるようになったのではないか。ウィルソンの「変節」の背景は、おそらくそんなところだったろう。

議事は終わった。議長が型どおり閉会の挨拶をした。その表情につかれの色はなかった。かれは満足げだった。代議員たちは、足ばやにセントラル・ホールから散っていった。ビッグ・ベンが5時の鐘を奏でた。なにか、空虚な後味が残った。

## 付 記

本稿は、筆者が昨年イギリス滞在中、労働党本部国際局の好意あるはからいで、特別大会傍聴の機会を与えられたとき、採録したテープ、書きとめたメモをもとに、報告書『労働党と共同市場』、および、タイムズ、ガーディアン、モーニング・スター等の日刊紙、サンデー・タイムズ、トリビューン等の週刊紙、ならびにトム・ネイルンの『イギリス・ナショナリズムとEEC』を参考にして、綴ったものである。

海外出張中、永年にわたって多大の学恩をうけた伊藤満、奥田秋夫、河野実、北林琢男、中川正、山下覚太郎の諸先生が退官され、その後何編かの記念号が編まれたが、当時は、文字通り東奔西走、席の暖まる暇もなかったため、心ならずも、失礼を重ねることとなった。ここに、遅ればせながら、諸先生の学恩に感謝し、ご壮健を祈りつつ、帰朝報告の一端として、この拙い稿を捧げたいと思う。